

加藤清正の実像

賤ヶ岳の合戦後、知行高が3000石に増大し、武将としての出世街道を歩き始めた清正。しかし、意外なことにその後3年間、彼の行動は謎のベールに包まれます。少ない史料をもとにその足取りを追ってみましょう。

〈7〉空白の3年間

天正11年(1583)の賤ヶ岳の合戦後から豊臣秀吉が九州攻めに着手する天正14年までの3年間は、清正の人生の中で最も謎に満ちた空白期間と言ってもよいでしょう。秀吉の家臣として天下統一事業を支える活動をおこなっていたことは間違いのないと思われませんが、具体的にどこで何をしていたのか、実のところよく分かっていません。残された史料の少なさもありますが、言い換えれば、秀吉に重んじられて出世していった石田三成や福島正則らとは対照的に、いまだ秀吉家臣団の中で重要な地位にいなかったことが窺い知れます。

まず、清正の所在から確認しましょう。賤ヶ岳の合戦後、秀吉は大坂城を築城して拠点を大坂に移します。また、前回述べたように天正11年8月、清正は大坂周辺に3000石の領地を与えられていること、天正13年には父・清忠の菩提を弔うため大坂に本妙寺(後に熊本城内に移す)を建立していることを考えると、遅くとも天正12年には清正も秀吉に従って大坂に移り住んだと考えられます。以後、肥後入国までの約5年間は大坂に拠点を置き、近畿を中心に活動していたと思われる。

では、具体的にどのような活動をおこなっていたのでしょうか。まずは秀吉の天下統一戦争との関わりの中で見ていきましょう。織田信雄・徳川家康連合軍と争った天正12年の小牧・長久手の戦いには秀吉軍の一員として従軍していた形跡がありますが、詳しい行動については不明と言わざるを得ません。また、秀吉に反抗する紀伊(現在の和歌山県)の国人衆や有力寺社勢力を降した天正13年の紀州攻め、四国の長宗我部氏を降した同年の四国攻めについては、清正の代表的な伝記である「清正記」やそのほかの伝記類にも記述がないこと

から、実戦部隊ではなく後方支援活動に従事していた可能性が高いと考えられます。紀州攻めに関して言えば、秀吉が紀伊に向けて大坂城を進発する天正13年3月21日の2日前に清正は新たに領地を与えられていますので、前哨戦で何らかの働きがあったのでしょうか。ちなみに、後に清正と肥後を分割統治することになる小西行長は、この時期にはすでに秀吉軍の海上輸送の主力として重要な役割を担っていたことが近年の研究で明らかになっています。

このように清正の活動実態については不明な点が多いですが、少しずつ領地が増えていったことは確かな史料上から確認できます。現存する秀吉の知行宛行状によると、天正13年に河内国(現在の大阪府)に434石、同14年には播磨国(現在の兵庫県)に300石、それぞれ加増されています。着実に領地を増やし、出世階段を昇っていった清正ですが、名実ともに武将と呼べる地位に就くのは、「主計頭」という受領名を名乗り始める天正14年頃だと思われる。従来、この「主計頭」を名乗り始めた時期については、賤ヶ岳の合戦後説(天正11年)、秀吉の関白任官同時説(天正13年)がありましたが、一次史料での「主計頭」の初見史料は、天正14年正月6日に出された秀吉の知行宛行状です。それまで秀吉から出される知行宛行状や書状の宛名表記は「虎介殿とのへ」と通称が使われていましたが、天正14年正月以降は宛名表記が「主計頭とのへ」に格上げされます。「主計」には、「会計を司る」という意味がありますので、清正は豊臣家の財政を担当する重要な役職に就いたと言えます。

史料が少なく、行動に不明な点が多いこの時期の清正ですが、「主計頭」を名乗り始める天正14年以降は豊臣家臣団の中である程度の地位を得ていたことが窺えます。

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

